

## 教育と研究の歩み40年を省みて

森 重 敏

### はじめに

今から40年余り前（昭和13年9月）、私は、高等学校（旧制五高）を病気で特別退学して、九州の片いなかの一小学校（大分県北海部郡四浦村越智尋常高等小学校）に代用教員として教鞭をとったことがあり、そこで尋常3・4年児童をいっしょに担当した複式教授を始めて経験したものである。その後間もなく（同年12月）、戦争（日華事変）のための臨時召集令にあって軍隊へ入隊したために、公式上は3年に及ぶ小学教職の在任ながら、実際は、わずか4か月足らずの教育体験にすぎなかったが、このとき経験した子供らとの出会いが、その後の私の、心理学を基盤とした教育・研究活動への出発的なモメントとなったように思われる。

この教育実践も数か月後の突然の応召で中断されてしまい、外地出征（北満でのソ蒙国境紛争—ノモンハン事件—）、生還（内地帰還）、召集解除と同時に小学校へ復帰、そして教員退職と同時に高校再入学といった経過で、太平洋戦争さ中での大学入学、そしてまた2回目の応召と同時に即日帰郷・大学帰学、そして敗戦を迎えるに及んで、やっと大学を卒業できたものである。

そうした曲折を経て心理学を専攻した大学の卒論は、「思考過程の研究」であったが、実質的な研究は、戦後の時代の序幕期における大学院入学（1945年10月）後の研究に始まる。それ以後35年の間、研究における牛歩の歩みを続けて今日に至っている。ふりかえって見ると、いつの間にかいろいろな研究が積み重ねられていて、自分ながら、そこに一定の方向性や特性のようなものがあることに気付くのである。具体的な研究課題や研究方法は多岐にわたっているが、対象は常に幼児ないし児童を主としたものであった。今回の停年退官の折に作成した私の研究歴に基づいて、簡単に、研究の遍歴をまとめ、わが反省の資と

したい。

### 1. 研究の始め—思考過程の研究

先ず、大学院（東大文学部）における私の攻究テーマは、「思考の心理学的研究」（1945）であり、ケーラー（W. Köhler）のチンパンジーの学習実験（Intelligenzprüfung an Menschenaffen 1921）を乳幼児対象に展開したゴットシャルト（K. Gottschaldt）の論文（Der Aufbau des Kindlichen Handelns. Zeitschrift für angewandte Psychologie Beiheft. 68）を踏まえて、その16課題を乳幼児に適用し、追試的に比較検討を行って、課題場面における幼児の解決様式を実験的に明かにした。この研究は、その後要約した形で、「課題場面における幼児の知能的行動について—課題解決過程に関する実験的研究—」（千輪 浩先生還暦記念論文集、1952）として発表したものである。

その後、思考過程に関する研究論文として、「仮定」（中野佐三・小口忠彦編 問題解決の心理 1956）をまとめたのであるが、これは、問題解決の一要因としての観点から、仮定の性質、役割、および仮定の経験的な検証の論理や方法等について試みた小論である。そして、続いてまとめたのが「児童思考の研究」（千輪 浩監修 児童心理学 1957）で、児童思考に関する研究史と思考研究の典式的なものについて、筆者の研究を含めて、まとめたものである。すなわち、思考研究の発達、研究領域と問題、幼児の具体的思考（乳児の知的行動に関する実験—リチャードソン E.M. Richardson の研究、幼児の知能的行動に関する実験—ゴットシャルトたちの研究）、幼児の言語的思考（ピアジェ J. Piaget の実験）、児童の推理（メイヤー N.R.F. Maier の実験）といった内容の論考である。そして、メイヤーの推理実験をやや詳しくまとめた小論が「課題解決—推理と生産的思考—」（高木貞二編 心理学研究法）である。さらに、こうした基礎的研究を踏まえて「学習過程」（現代教育心理学大系 5 学習指導の基礎 1958）をまとめ、学習過程の本質、学習過程の諸相等について論述した。その後、言語的思考と対比的な関係にある「非言語的思考について」（言語生活 第130号 1962）まとめ、幼児の思考、言語を奮われた者の思考、そ

して動物の思考等について論考したものである。

こうして、一時は、思考心理学の領域において、特に insight や problem solving などに関する研究に関心を深め、そうした問題を含んだ W. Edgar Winake (ハワイ大学助教授) の The Psychology of Thinking, 1952 の訳出を始めたのであるが、これは未完のまま停滞しており、もう一つの大学院論文「優秀児」に関する研究とその展開に道を譲る形となった。しかし、そうした幼児対象の思考研究は、その後における幼児の言語発達に関する研究をはじめ、幼児の発達研究、そして幼児教育研究へと進んでいった先導的な基礎研究の役を果たしたように思われる。

## 2. 優秀児の研究

優秀児に関する研究は、先にちょっと触れたように、大学院における2回目の攻究課題であるが、これに取り組んだのは、思いがけないきっかけによる。それは当時(1947年)サイドワークの積りで勤務した文部省教育研修所(国立教育研究所)の研修員として、わが国で始めて試みられた進学適性検査の結果処理・検討及びその研究業務に携わっていた折、東京文理科大学(後の東京教育大学)教授・依田 新先生より、東京第一師範学校(後の東京学芸大学)教授阪本一郎先生を通じて、「優秀児」という論文をまとめることについて、おすすをを受けたことに起因する。(当時、私は、第一師範学校授業嘱託をも兼ねていた)。そうした事情で始めた優秀児研究ではあるが、当時わが国における特殊児童の研究は、諸外国の研究に比べ立遅れの状態にあると受けとめ、そのなかでも、最も低段階にあるのがこの優秀児の問題であろうと考えて、研究を始めたものである。そして、本論は、その後の実験的研究に対する序説のようなつもりで取り組んだ、優秀児に関する基礎的研究としての小論であり、1. 優秀児の概念 2. 優秀児の知能 3. 優秀児の性格 4. 優秀児の教育の4章から構成されている。この拙論は、アメリカの一私立小学校で、知的普通児(IQ90~110)と知的優秀児(IQ120以上)の両群に作業を試みて観察し、評定した結果をまとめたヒルドレス G. Hildreth の論文 (Characteristics of young gifted children. J. Genet. Psychol., 53, 287—311, 1938.) を踏まえ

てまとめたものである。ヒルドレスによると、知的優秀児は、普通児に比べて知能が優秀であるばかりでなく、性格的にも優れているとして、多くの好ましい性格特徴を挙げている。しかも、そうした優秀性は5歳頃が際立っていることを指摘したものである。

こうして、ターマ Terman, L. M. の研究をはじめ幾多の研究者によって明かにされた優秀児の発達的な特徴に研究的関心を深めていった。(これに関する拙論「優秀児」は、東京文理科大学児童心理学研究室編、特殊児童の心理 児童心理叢書 V, 1948に収載)そこで、知的優秀児の発達特質の究明のために特定の被験校(港区立三光小学校)における優秀児の実験的研究や、後述のような、京都府師範学校附属小学校第2教室(優秀児学級)出身者の追跡研究並に、大阪市で発掘された抜群優秀知能児の追跡、及び柿ノ木坂幼稚園(東京都目黒区)三光小学校(東京都港区)における優秀児の検査・調査及び追跡を実施したのである。そうした、優秀児の特質に関する実験的研究や追跡的研究を進めていく過程で、筆者の研究結果を含め、知的優秀児に関する内外の研究成果をまとめた論考が「優秀知能」(現代教育心理学大系 14 特殊教育, 1958)であり、とくに、わが国における天才児・優秀児研究についてまとめたのが、「天才児」(依田 新他編 児童心理学ハンドブック, 1959)である。

### (1) 戦後優秀児の検出とその追跡

#### ① 幼稚園における優秀児の追跡

都内の一幼稚園(柿ノ木坂幼稚園)で検出した知的優秀児(WISCのIQ 130以上のもの)(50名)について卒園後4~8年(第1次追跡)及び5~13年(第2次追跡)の時点で、面接その他の方法で追跡的に、諸般の心理検査・調査を行い、普通児(IQ90~114のもの)と比較、検討したものである。

#### ② 小学校における優秀児の追跡

都内における典型的な実験校(三光小学校)において優秀児(WISCでIQ130以上のもの)(50名)を検出すると共に、最初の検出後4年(第1次追跡)、11年(第2次追跡)の時点で追跡を試み、普通児(IQ90~114)との比較において検討したものであるが、両群には、知能のほか、性格特性、学業成績、その他の精神・身体検査、健康度、進学・就職状況、家庭的背景等の検査

- ・調査を実施して、年齢発達的变化を明らかにした。

## (2) 戦前優秀児の追跡

### ① 大阪市における抜群優秀知能児の追跡

昭和14年に大阪市の尋常小学校児童約35万人中より、鈴木治太郎氏による鈴木ビネ式知能検査で検出されたIQ160以上の優秀児（抜群優秀知能児）145名中、家系調査を受けた対象70名の追跡を試みたものである。この場合、①本人の発達過程を、知能・性格・興味・成績・業績・その他の精神発達、身体発達、家庭的・社会的背景、配偶者の状況等の面から検討、②本人の子供(二世)の発達状況を、知能・性格・その他の精神発達、身体発達等の面から検討、③親子間の発達の相関を、親のしつけと子供のパーソナリティ、親子間の知能の相関、性格の相関等の面から検討した。この結果は、拙論「優秀児の追跡的研究—大阪市における抜群優秀知能児を中心として—」（高木貞二先生 喜寿記念論文集 1971）としてまとめ、また“A FOLLOW-UP STUDY OF INTELLECTUALLY GIFTED CHILDREN IN OSAKA 1972（第20回 国際心理学会議論文抄録）として、国際心理学会議で発表したものである。

### ② 京都府師範学校附属小学校第二教室出身優秀児の追跡

大正7年4月、京都師範付小に「第二教室」の名で創設された優秀児学級を、昭和18年3月廃止されるまでに修・卒業した児童559名を追跡したものである。同窓会「樗の実会」の名簿を手掛りに、第1次調査（昭・34年3月）に続く第2次調査（昭・45年4月）を、質問紙調査法で実施した。この結果については、拙論「優秀児の追跡的研究—京都師範附属小学校第2教室を中心として—」（東京都立大学「人文学報」第93号昭・48）にまとめられている。

その他、優秀児について長年試みた研究結果については、中間報告の形で、そのつど、心理学会その他関係諸学会で、「知的優秀児の特質に関する基礎研究」として、第1報告（1959）から第27報告（1973）に及んで発表したものであるが、これらを、合わせまとめたのが、拙著「わが国における優秀児の心理学的研究」（文部省学術助成図書、風間書房、1972）である。

## (3) その他の優秀児研究

上記の追跡的研究とは別に、従来、特殊教育（精薄児など）の研究を中心に、

東京都内小・中学校の現場の教師をメンバーとしてサークル活動を行っていた東京都臨床心理研究会は、当時（昭和33年）、私を研究顧問として、教育現場の立場から優秀児問題をテーマに、「優秀児の心理と教育」について実態調査及び事例研究を実施したことがある。すなわち、各メンバーが所属する都内の小学校（7校）と中学校（1校）の全校児童の中から、WISCでIQ 130以上のもの（171名）を検出し、かれらを対象に、家庭環境、生育史、身体発達、知能、性格、行動、読書興味、学業成績、交支関係その他について調べたものである。この結果を共同でまとめたのが、「優秀児—その心理と教育—」（酒井清と共編著、誠信書房、1963）である。

こうした研究の過程で、優秀児及び優秀児研究に関する小論を、関係の心理学諸学会や諸研究誌などに発表したもので、それらを集大成したのが、先述の拙論（わが国における優秀児の心理学的研究）で、学位論文となったわけであるが、この研究成果に基づいて、一般向けにまとめたのが、拙著「優秀児の心理」（日本文化科学社、1971）である。

### 3. その他の研究

#### (1) 親子関係に関する研究

その他の研究のうち、比較的長期に亘って行った研究、とくに文部省科研費による共同研究に、「親子関係に関する基礎研究」がある。この研究は、山下俊郎先生（都立大名誉教授）を代表者とする親子関係に関する研究の一環として、三浦 武他（三輪 正、八重島建二、島田俊秀）と共に、「父・母・子関係研究グループ」を構成し、昭和32年度以来、継続的な研究を実施したものである。この調査研究は、最初、1953（昭和28）年12月に、奄美大島が、それまでおかれていたアメリカの統治からわが国に復帰した直後、私が、鹿児島大学の調査団の一員として、その後は九学会連合の共同調査団における日本心理学会からの調査員として、そしてまた個人的にも、その前後数回にわたって実施した「奄美島民のパーソナリティ」に関する調査研究で経験的に作成した「親のしつけ態度」に関する質問紙法が基礎となり、何回かその質問紙の型式が改正的に作成され、因子分析的な作業段階を経て、最後に1970（昭和45）年に至

って、親子関係診断検査(PCRT) —A型・B型・C型(東京心理, 1970)の標準化を見るに至ったものである。この間、研究の結果は、「父・母・子関係の分析」ないし「家族関係に関する基礎研究」として、第1報(1958)～第14報(1965)に亘り、関係諸学会で三浦その他と共に発表したものである。

これより先、奄美大島が日本復帰をとげた時期(昭和28年12月)をとらえて、私は翌年1月、奄美全島にわたって、幼稚園、小・中・高の幼児・児童・生徒、並にその父兄を対象に前述の「親のしつけ態度」に関する調査を試みた。このときの研究資料は、後(昭和30年, 同31年)に続いて行われた九学会連合の文部省総合研究費による調査(奄美大島の実態調査総合研究)における「奄美島民のパーソナリティ」研究の際に生かされ、その結果は、「奄美諸島島民のパーソナリティ—奄美—」(日本学術振興会, 1959)として報告されると共に、その他の発表機関に公にされたものであるが、この資料を基にまとめられたのが、拙著「子どもと家庭環境」(福村出版 1968)である。

その後、私が、幼児教育にも関係するようになってから、幼児及び児童を対象とした発達心理学的研究を行うことが多くなり、さらに幼児保育に関する研究へと進んでいった。

#### 4. 幼児研究から幼児保育研究への関心

幼児研究に対する私の関心はかなり早く、大学院(東大文学部)在学中、「幼児の自然観に関する調査」(心理学研究 第19巻 1947)に取り組んだのを始め、若干の研究雑誌に発表したものである。しかし、本格的な幼児研究は、私が、1954年の春、鹿児島市の私立八幡幼稚園園長を兼任するに及んで展開したといえよう。未発表ながら、さっそく、そこで取り組んだ問題は、「園児の通園時間と天候」、「遊びとけが」、「基本的生活習慣」、「着衣枚数と家族構成」等の調査研究を、父兄といっしょに行ったものであるが、それを可能にしたのは、PTAの規約の中に、園と父兄とによる幼児のための共同研究の必要性を明記してもらったことである。これ以来、私は、幼児教育における教育心理学的研究を発展的に続けることができたのである。

こうして、私は、その後、幼稚園教員養成(東京家政大学・児童学科, 岡山

大学教育学部・幼稚園教員養成課程）や保母養成（全国保母養成協議会）の問題や養成機関に関係する機会を持つようになってから、いっそうそうした研究の機会に恵まれ、結果も、日本保育学会その他の機関で公表できた。例えば「玩具の選択傾向に関する一調査，1958」，「季節保育所の保育効果に関する一考察，1961」，「三歳児保育に関する基礎研究，1968」，「子どもの遊びとけが，1957」，「幼児の文字学習とその指導の問題に関する一考察，1976」，「子どもの遊び場と健全育成，1973」，「親子関係と子どもの人格形成，1976」，「遊び場の新しい設備—ノルウェーにおける新しいモデルの試み—1980」及び「保育と人間形成，1974」（編著），「遊びの心理学—子供の遊びと発達—，1980」（共監訳）等を主なものとして、他の幾多の関連的な研究を積み重ねていったものである。

### おわりに

以上みてきたように、私の教育・研究の歩みは、牛歩の速度ながら、振り返って見ると、いろいろと、特徴ある研究結果の蓄積に気付くのである。思えば、これまで、実に遠い道程ではあったが、何れも、終極的な目標は遙か彼方にあつて、遼遠なる前途に向う思いを一しお深く覚えるものである。この未完なものへの接近を希念しつつ我が未熟な精神年齢を鞭打って行きたいと思う。

終りに、私の本学退官記念に意味あるこの人文学報特集号を企画して下さった本学教育学研究室の諸兄に対し、また、特に玉稿をいただいた心理学科の三浦 武教授、学生相談室の鳴澤 實助教授及び横溝亮一君に対して心から感謝申し上げると共に、拙稿遅延によるご迷惑にもかかわらず、本誌の刊行のためにたいへんご尽力下さった坂元忠芳助教授並びに出版関係者に対して、衷心より深謝致したい。